

自然観察NOW

No.4

野幌森林公園自然情報

発行：2015年8月6日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

初夏6月に野幌の新緑の森を歩き、たくさんの花を観て、野鳥のさえずりの声を楽しんだ観察会。それが暦はもう8月、野幌の森は今盛夏を迎えてます。森を囁りでにぎわせていた野鳥たちも繁殖期を終え、今はすっかり静かな森となって来ています。そして、木漏れ日の内で、森の花たちも夏の花に衣替えをしています。今日1日は、猛暑の続く街中の生活をしばし忘れて、森の涼やかさを味わいながら、草花や木々の実、昆虫や動物たちの息づく野幌の夏の森を楽しんでみてください。

木漏れ日を受けて野幌の森に夏を告げる花たち

オニヤンマやトンボの仲間が風を切って飛ぶ姿を見る中で、歩道の脇ではたくさんの蝶や昆虫が花の蜜や樹液を求めて花々に集まっています。花と共に、そんな昆虫を観察するのも夏の森を歩く楽しみのひとつです。まずは、野幌の夏の花々の中から、主な花を紹介します。

○キツリフネ（黄釣舟）ツリフネソウ科 1年草 花の色：黄色 ※北海道の他に、全国に分布。

深緑の沢沿いに群生して、漂うように咲く黄色の帆舟。森の清涼感を一層引き立てる花である。花の後ろにある距の部分は、尾のように垂れる程度で巻きこまない。「ツリフネソウ」は、距の先端がせんまいのように巻いている。キツリフネの花の花粉を媒介する昆虫は、ハナバチ。

(名前の由来)「ツリフネソウ」の花は、細い花柄が舟がぶら下がっているように見えるので付けられた。ツリフネソウの花は紅紫色だが、キツリフネは黄色い花なのでこの名になった。

(別名)「おこりんぼ」。ホウセンカと同じ仲間で、花後に紡錘形の実が付き、熟すと急に勢いよくはじけて種子をとばす様子を言った。子供の頃、この実をつぶして遊んだものである。

○エゾミソハギ（蝦夷禊萩）ミソハギ科 多年草

花の色：赤紫色 ※北海道の他に、全国に分布。

お盆の頃に山麓や原野の湿原や水辺に咲き、仏前を飾る夏の花。日本産は2種で、「ミソハギ」と「エゾミソハギ」。この2種は、変わった花をつけることで有名、それは雄しべと雌しべの長さが花によって違い、長いもの、短いもの、中くらいのもの3種類のパターンがある。これは、自家受粉を防ぐためのしくみである。

(名前の由来)「ミソハギ」は「禊萩」と書き、ちょうどお盆の頃に咲くこの花をお供えに使うことからこの名がついた。「エゾ」は「蝦夷」で、北海道に多く生育する花から。

(別名)「精靈草」・「聖靈花」・「盆花」・「水懸草」とも呼ばれる。山菜や漢方にも利用される。

○ヨツバヒヨドリ（四葉鶴）キク科 多年草 花の色：白色または紫色 ※北海道と本州(近畿地方以北)・四国に分布。葉は輪生。全国に分布する「ヒヨドリバナ」の葉は対生。日当たりよい林の縁や草原に咲く花。染色体は2倍体であるが、数倍体のものもみられ、生物学的に興味深い植物である。

(名前の由来)「ヨツバ」は葉のつき方からきた名前で、茎に4枚ずつ輪生している葉を「四葉」に見立て、「ヒヨドリ」は野鳥の「ひよどり」が鳴くころに開花するからと言われる。また、葉や茎がよく燃えるので、「火よどり」(火よ取り)という説もある。

(別名)「クルマバヒヨドリ」。琉球列島から遠い北海道まで飛来する蝶「アサギマダラ」は、夏に礼文島までも渡ってきて、この「ヨツバヒヨドリ」の花を好んで食べる。鹿も林道脇のこの花の葉脈を除く、歯肉のやわらかい部分だけをよく食べる。また、薬草としても利用される。



野幌の森の夏の水鳥たち

野幌の森には、いくつかの池があります。大沢の池、松川の池、瑞穂の池、原の池、荻野の池などです。その池には、意外に多くの水辺の鳥たちが繁殖し、渡り鳥も渡って来ます。

野幌には、かつては北海道を代表するアオサギの大きなコロニーがありました。昔々は、大沢園地では、札幌近郊では今はもうすっかり見られなくなってしまったアカショウビンが、観察会ではいつも目の前に姿を見せてくれて、素敵な声を聞かせてくれたと言います。

それでも、水辺や湿地に咲く花々の中に、今もまだまだ水鳥たちが素敵な姿を見せてくれます。今日の観察会の瑞穂の池では、じっと水鳥も観察してみてください。もしかしたら、親鳥に連れ立つて泳ぐかわいい雛たちに会えるかもしれませんよ。

○ オシドリ（鶴鶩） カモ科 北海道(夏鳥) ※本州・九州以北で(留鳥・冬鳥)。

雄は栗色のイチョウ葉の形をした“銀杏羽”が美しい淡水ガモ。山の湖や溪流で生活することが多い。よく木の枝に止まる。ドングリのような木の実を好んで食べる。営巣の巣は樹上の洞。ヒナは孵化後まもなく巣から地上に飛び降りて、水際まで歩く。ちょうど今頃の季節、野幌の森の池では雌の親鳥がヒナを連れている姿が見られるかもしれません。

一夫多妻。“おしどり夫婦”と言われるが、カモ類と同じく繁殖シーズンごとにつがいが解消される。

なお、鳥は90%が一夫一妻と言われる。

(名前の由来) 雌雄の仲が良く、寄り添うようにして休むことが多いその様子に「雌雄相愛(を)し」から「オシドリ」となった。古く『日本書記』に登場する。

○カツブリ(鳩) カツブリ科 北海道・本州中部以北(夏鳥) ※本州中部以南(留鳥)。

日本で最も小さいカツブリ類。雌雄同色。

繁殖の時は、池や沼で水草を積み上げて浮き巣をつくる。繁殖が始まると雄が雌に餌をプレゼントする”求愛給餌“をする。

(名前の由来)水を搔いて潜ることからの名などの諸説がある。古名の「にほ」(鳩(にお))も「水に入る鳥」という意味で、古く『古事記』に「にほどり」で登場する。室町時代から「カツブリ」と呼ばれるようになった。(鳴き声)は、高く鋭い声で「キリキリキリキリキリ…。」とよく鳴く。

○カワセミ(翡翠・川蟬) カワセミ科 北海道(夏鳥) ※本州から沖縄(留鳥)。

”青い宝石“、翡翠(ひすい)“と呼ばれる美しい鳥。コバルトブルーの背中、オレンジ色の腹。雌は下くちばしが赤い。繁殖時に雄が雌に餌をプレゼントする”求愛給餌行動“をする。その際に、雄は魚を頭から渡す。巣をつくって見せたりして求愛をする。水辺の土手などに横穴を掘り巣を作る。

(名前の由来)この鳥の鳴き声「そび」、「せび」から「せみ」となり、川などの水辺にいるので、「カワセミ」となったという説が有力。古く『古事記』に「ソニドリ」とあり、奈良時代には、「ソニ」・「ソニドリ」と呼ばれていた。江戸時代になって「カハセミ」(かわせみ)となった。

異名の多い鳥で、ショウビン・カワショウビン・ソナ・ソニドリなど、全国に130語の方言が残るという。アイヌの伝説にも「水の神」として出てくる。

雛は孵化後1か月近くで巣立ち、その若い個体が2回目の繁殖をしている親鳥の雛(弟妹)への給餌を手伝う「ヘルパー行動」をする。



執筆(道場 優(どうじょう まさる))

★ 9月の観察会 ★

※「恵庭公園観察会」9月6日(日) 10:00~12:30 (集合: 恵庭公園中央駐車場)

※「秋の花でぎわう森を歩こう」9月13日(日) 10:00~14:30 (集合: 自然ふれあい交流館)